

平成 30 年度第 1 回豊田市環境審議会 会議録

【日時】 平成 30 年 9 月 26 日(水) 午後 3 時 00 分～4 時 30 分

【場所】 豊田市役所 南庁舎 南 5 2 会議室

【出席者】

- (委員) 会長 千頭 聡 (日本福祉大学国際福祉開発学部 教授)
副会長 渡部 教行 (豊田市自然愛護協会 会長)
梅村 豊作 (市民公募)
大久保 竜治 (豊田商工会議所第 2 工業部会 副部会長)
大熊 千晶 (日本野鳥の会 レンジャー)
長内 隆久 (NPO 法人とよたエコ人プロジェクト 事務局長)
加藤 智和 (市民公募)
近藤 恭弘 (豊田商工会議所第 1 工業部会 部会長)
篠田 陽作 (名古屋経営短期大学子ども学科 講師)
島田 知彦 (愛知教育大学教育学部理科教育講座 准教授)
杉山 佐江子 (市民公募)
杉山 範子 (名古屋大学大学院環境学研究科附属 持続的共発展教育
研究センター 特任准教授)
野田 美津江 (とよたエコライフ倶楽部 委員)
原田 俊之 (豊田市区長会 理事)
前田 洋枝 (南山大学総合政策学部総合政策学科 准教授)
水野 清 (愛知学泉大学現代マネジメント学部 准教授)
山内 徹 (市民公募)
- (事務局) 田口環境部長、藤井環境部副部長、伊藤環境政策課長、近藤環境保全課長、
神谷廃棄物対策課長、松井ごみ減量推進課長、長嶋清掃業務課長、岩田清
掃施設課長 ほか

【欠席者】 3 名

【傍聴人】 なし

- 【次第】
- 1 委嘱状交付
 - 2 環境部長挨拶
 - 3 委員自己紹介
 - 4 議 題
 - (1) 会長及び副会長の選任
 - (2) 環境基本計画等の進捗確認方針について
 - (3) 食品ロスの削減に向けた取組について
 - 5 その他

- 1 委嘱状交付
- 2 環境部長挨拶
- 3 委員自己紹介
- 4 議題
 - (1) 会長及び副会長の選任
会長に千頭聡委員を選任 副会長に渡辺教行委員を選任
 - (2) 環境基本計画等の進捗確認方針について

事務局 (資料1及び資料2に基づき説明)

会長 部会ごとに施策の進捗確認を行っていく理解だと思ふ。

委員 環境基本計画の大きいサイクルで最終的に達成できていないものを、原因や理由を分析して次に必ず生かしていくような、方策や工夫があれば教えてほしい。

事務局 現時点では具体的な方策は想定していない。審議会の中で工夫し、ご意見いただきながら進めたい。

会長 今後、審議会の中身を議論してほしい。

委員 計画ができたことは、野球でいえばチームができたことと同じ。実際に来たボールに対して打ち方を変えなければいけない。そういった細かい配慮とチェックを入れないといけないが、誰がやるのか。その点を決めないとチームが動かない。

事務局 市環境部で見極め、審議会の意見を聞きながら、しっかりやっていく。

会長 評価をしたときに、どうしても真ん中の評価に偏りがち。例えば、Aと評価した人数と理由、Bと評価した人数と理由など、多くの意見を踏まえて、それぞれの視点によって評価の結果が違うことを大切にしていは。

委員 平成30年度版(平成29年度実績)の環境報告書は審議会や専門部会に諮ったものか。

事務局 事務局で取りまとめたもの。取組の実績を載せている。

会長 質問は、環境報告書の編集スケジュールが8月と記載されているが、審議会の専門部会や全体会における評価のスケジュールが、報告書の編集に間に合わないようにも読み取れないことに関することだと思ふ。

事務局 できる限り最終的な評価内容を載せられるように調整したいが、スケジュール上どうしても間に合わないものは表現を事務局で整えることはある。

委員 評価の方法は決まっているか。

事務局 内部評価したあと、専門部会に諮り、委員の視点で評価していただきたい。詳細は、次回の審議会にて提案する。

委員 計画の目指す姿に向かった今年度の実施内容は決まっているのか。いつ決めるのか。その年の目標をどこにおき、達成水準をどうみていくのか。

事務局 計画の施策事業は、環境部を超えて市全体で実施する内容。市では年度当初に、部局ごとの重点目標を設定し、取り組む内容を記載している。重点目標は公表されているが、詳細の事業などは、計画掲載内容と比べて表現が異なる場合もある。

委員 その年の進捗は、正確な、定量的なものに対する評価にはなかなかならないのか。

事務局 評価に結びつかない可能性はある。どれだけ進んでいるかを評価していく。

- 会長 行政の考え方からすると、ちょうど 1 年遅れるイメージ。今この場で前の年度を評価しても、次の年度に生かすことになる。
- 委員 成果指標の最新値以外を評価書に載せていくことはできないのか。数字だけではなかなか現れない現状を、表現したい。例えば、講座などの参加者満足度のよう なものを表現できないか。
- 事務局 成果指標は計画に掲載されているもので、成果は客観的に、数字にできるものとして整理している。
- 会長 成果指標は誰もが納得できる数値。市の施策に対して、委員の実感、立場から今後評価したら良い。

(3) 食品ロスの削減に向けた取組について

- 事務局 (資料 3 に基づき説明)
- 委員 フードドライブは、まだ年に 1 回しか開催していない。最終的には、いつでも社会福祉協議会等に持っていくことができるよう、ぜひ続けてほしい。市民に、活動がより浸透するようになるとうい。
- 委員 もっと宣伝できないか。「フードドライブ」を知らない人が多いと思う。
- 委員 2019 活動について、以前、宴会の幹事が声をかけたことがあるが、食べきれなかったことがある。原因は、乾杯後に食べるより前に話を始めてしまった、終わる 20 分前は満腹、又は 2 次会を気にしてしまっていたことなどと考えている。
- 委員 私の体験談として、法事後の食事会でタッパをお店にリクエストする人がおり、私自身も実践したらその場の全員がタッパに詰めだして、テーブルの上の料理が全てなくなった経験がある。協力してくれるお店を集め、TP (タッパ) 運動などをしてはどうか。
- 委員 メリットは、店舗にとっては、持ち帰った料理を家族が食べることでお店の宣伝効果になり、お客が増えること。家庭にとっては食料が増え、市にとってはごみが減る。ただし、この取組は、衛生上の問題をクリアしないと行けないが。
- 委員 今はタッパを使う文化が無くなったのではないか。
- 会長 アメリカで流行したドギーバッグを置いている店舗もある。名古屋市内では、やっているところもある。
- 委員 世代によっては、タッパを至極当然に依頼するが、店舗側が、食中毒を懸念して断ることもある。お酒を飲まない人は食べ残さない感覚がある。
- 委員 豊田市でもやっている店舗があったが、ずいぶん減ったと感じる。やはり食中毒の問題だと思う。
- 委員 以前、折りたためるドギーバッグを渡された宴会があったが、誰も使わず、非常に多くの食べ物が残った。参加した人が率先してやらないといけない。持って帰ることがクールだと思われないと。
- 委員 持ち帰ったとき、衛生面を気にする家族に反対される。家事をしていないとわからないかもしれないが、作る手間や食材の大切さ、発生するごみのこともわかってほしいと感じる。

- 委員 好きなものだけ食べ、嫌いなものは残してもよいという考え方が、戦後の一つの食文化の中で根付いていると思われる。(動植物の) 生命をいただく、という考え方や、誰かが集めて運んでくれたことに対して感謝する気持ちが薄らいでいる。教育の現場で、感じる心や食べ物を捨てるのもったいない、と思う気持ちを取り上げなければならないのかもしれない。
- 委員 メーカーが在庫をもつ、業務用の廃棄が大きい。本当に必要としている人への流通経路を広げていくことが、本当は必要。
- 会長 知多半島にある大型商業施設は、立地する前に食品ロス対策を提案している。常滑市の社会福祉協議会が受け入れ、知多半島にある NPO がそれを受け取る。米が人気で、パンは引き取り手が少ないなど、細かいところのミスマッチはあるが、フローや仕組みが先にできている。
- 委員 子ども食堂との連携など、市外へもっていくのではなく、市内で消費する取組ができればよいと思う。

5 その他

- ・「豊田市路上喫煙の防止等に関する条例」の制定について
 - ・EU 国際都市間協カプロジェクトについて
- それぞれについて、事務局から報告。

以上